

「2008年以来、11年の刑で服役中のノーベル平和賞作家で詩人の劉曉波（リュウ・シャオボ）日本で初めての詩集刊行」という帯の『牢屋の鼠』（田島安江・馬麗 訳・編）を福岡の書肆侃侃房から寄贈いただく。名前だけは知っていたが、読んだことがなかったので、読ませていただいた。

中国での自由のなさは新聞やTVで仄聞するだけで、非体験的な情報でしかないが、そのむかし、天安門事件などをTVで見ていると、海を隔てて暮らしているほくにも、身体的、精神的な臨場感が共有されてしまった、という経験があった。だから、党の大綱が個人の思索に優先している国で生きている人たちの困難さに較べれば、この国での憂鬱など屁のようなものにおもえてくるときがあるが、それでも目先の屁のような憂鬱に捕らわれて生きているのがほくである。

詩集タイトルにもなっている『牢屋の鼠―霞へ』全篇。霞は奥さんの名前。

一匹の小さな鼠が鉄格子の窓を這い

窓縁の上を行ったり来たりする

剥げ落ちた壁が彼を見つめる

血を吸って満腹になった蚊が彼を見つめる

空の月にまで魅きつけられる

銀色の影が飛ぶ様は

見たことがないぐらい美しい

今宵の鼠は紳士のようにだ

政治である。

劉曉波は精神的拘束、身体的拘束という二重の拘束下で詩を書いている。それが暗喩という方法をとるのは、直截的に語れば薄っぺらな個人の感傷、恨み、抗議、無念、などの感情の吐き出におわってしまうからだろうか。暗喩を多用することで、個人の感情だけではなく、同じ牢獄に閉じ込められている人々との共生をめざしたのだろうか。それともほんらい劉曉波自身が暗喩の詩人という素質を持っていたからだったのだろうか。

集中から『驚愕―霞へ』全篇。

驚愕は石ころ一つから始まる

次は雑草と

葉についた斑点と

草むらにある野獣の足跡

見慣れない空の一部が落下する

禁断の果実の味は

星へとたちのぼる

驚愕は一回目の呼吸から始まる

コップに酒を残し一人で眠りに入る

目を見開いたまま虚しく昔のままに

世界はごく近いところにある

電灯がぶらりと来てぶらりと去る

迷っている間に

ほとんど声をあげるまもなく

食はず飲まず牙を研いだりもしない

キラキラ光る目をして

月光の下を散歩する

ほくたちでもこれぐらいの暗喩は使うことがある。精神的狭窄、抑圧、疎外、喪失、といった精神的拘束を表現するに擬似身体的拘束という状況を演出し、そのうえにわが身を据えるということがある。孤独で寂しい。人間関係も社会環境にも適応できなくて、自分は鉄格子の中にいて、鼠のようにあちらとこちらを行き交うこともできない。しかし、自分は鼠だ。牢獄に囚われている鼠という存在でしかない。自分はいま紳士的な装いをして牢獄のなかでおとなしくしているが、いまに、キラキラ光る目をして月光の下に出ていくのだ。いまは鼠だが…。

いまの若い人たちには、この世間の人間関係や世事に行き詰まって、ネットの世界に新世界を見つけようとするが、ネットの世界ですら孤独に陥っていく、といった道筋がみられるというが、囚われている、といった認識はそういう若い人たちも同じ精神的状況なんだろうけど、劉曉波のはあい、身体的拘束は現実である。かれのすべてを拘束している。社会も、家族も、友人も、思索も、愛情も、他者（国家）によって拘束されている。自分ではどうしようもできない、他人任せの世間を生きている。いま中国という国でおこなわれているのは、オルテガのいう「生の国有化」だろうか（ちよつと強引なこじつけだが）。あらゆるものにたいする国家の介入、国家による社会的自発性の吸収、であり、共産主義という超越的な幻想に支えられた恐怖

もう三十六歳

僕は神に近付いたのか

驚愕は一つのうそからはじまる

二つの空のコップ

血痕をきれいに拭き取った広場は

もつと裸の女に似ている

部屋を掃除する時に証拠を破壊し

記憶を片づける

窓は海から遠く離れ

突然空が残酷に白み

ホコリと詩の間の盾になる

驚愕はおじけと違って

さらに絶望に近い

嘲笑、風刺

しよせん厳肅よりさらに真面目だ

ほとんどどこにも

悲哀と呼べるものはない

人々がただ笑っている

どうか存分に笑うがいい

驚愕は、石ころ一つ、一回目の呼吸、一つのうそ、からはじまるといっている。驚愕はほくらのすべてのなにげない行動、言動、所作からはじまるといっている。それらはたぶん、自由

な国とおもっているこの国に住んでいるほくらもすこし注意深く世間を見渡せば、そんなきつかけは静かに用意されている。そのことをどこで拒否するか、どこまで野放しにさせるか。

ほくはサッカーはスポーツニュース番組でチラッと見るだけだが、あの「サポーター」という応援団の過激な横断幕や応援旗にはいつもびっくりしているし、試合後のサポーターの興奮ぶりもニュースでみたことがある。DJポリスとかが熱狂したサッカーファンを手玉にとったとかいうことがニュースになったりしていた。南米のある国ではオウンゴールした選手が殺されたというニュースを聞いたことがある。

サッカーとは「オフサイド」という性善説に立つようなルールがあつて、紳士のスポーツといわれているらしいが、あの熱狂ぶり、自チームへの思い入れは、サッカー好きでないほくにはまったく理解できない。

そのサッカーの人気チーム、浦和レッズのサポーターが、ゴール裏の観客席ゲート付近に「JAPANESE ONLY」と書かれた横断幕を掲げ、浦和側もそれをすぐに撤去しなかった、と新聞に載っていた。横断幕を掲げたサポーターグループは、ゴール裏は聖域で海外からの観光客にはいつてほしくなかった、と弁明しているそうだが、そうだとしたら、浦和レッズというサッカーチームは自分たちの私有物といっていることに等しいが、ほんとうのところは、在日韓国、朝鮮人にたいする拒否だろう。

最近ヘイトスピーチが問題になっている。ネトウヨと呼ばれる人々、インターネットで右翼的な発言をする人々が増え、在特会（在日特権を許さない市民の会）が、在日韓国・朝鮮人が

いるが、現在のネトウヨもヘイトスピーチも、ある種の「空気感」に支配されているようにおもう。

日本の政府が何か気にくわないことをいうと、中国や韓国では、日本の旗が燃やされ、車が壊され、日本店が襲撃される、というニュースが流れている。そんなことで嫌中国、嫌韓国という「空気」が醸成されているのかもしれない。北朝鮮にいたつては王朝国家である。日本人を拉致している。さまざまなおもいがあるなかで、匿名性という誰にもバレないで罵詈雑言が言えるネットの世界で、この日本という世間での、今日一日の人間関係の憂さを晴らすかのように、上司にバカにされるようなことを言われた恨みを晴らすかのように、ネットのなかで他人の意見に乗っかって発言を繰り返してきた人々が、感情が昂ぶつて、そんな匿名性に飽き足らなくおもうようになり、街中に出て、顔をさらしてこの鬱憤を吐き出すのもいいかな、とおもってしまったのではないだろうか。そこに行けば、自分と意見を共にする人たちがいる。その人たちの顔を見ることができる。同じ言葉で「正義」を発散させることができる。上司に認められなくても、社会に認められなくても、鼠のように牢獄を這い回っているちっちゃな存在でも、ここでは「空気」が共有できる。自分のおもっていることは、ネット上でも多くの人が言っていることだし、何もまちがってはいないだろう。そんな「空気感」がヘイトスピーチデモという極端な「空気」へと走らせているのではないだろうか。

たしかに普通に生活していたら「空気を読む」ときはある。この場では極端なこととは言わないでおこう、とか、この場で主

所有しているとされる「在日特権」を無くし、普通の外国人と同等の待遇に戻す（逆差別を無くす）ことを目標に活動している、それが街頭でのヘイトスピーチにまでエスカレートしている、とTVや新聞が伝えている。

「在日特権」に関しては野間易通が『「在日特権」の虚構』のなかで「特別永住資格」「年金問題」「通名と生活保護受給率」「住民税免税」など、丹念な反論をおこなつて在特会の言い分が虚構であることを解き明かしているが（野間の件は村上裕一の『ネトウヨ化する日本』（角川選書）からの孫引き）、なかおさまりそうもない。

ほくはネットの世界に疎いのだが、村上裕一の本を読んでみると、ネットの世界は本当に傍若無人の世界だな、とおもわずにはいられない。そこで展開されているのは、確固とした論拠や、自分の目で見てきたこと、自分で試行錯誤したことではなく、多くの人がそう言っているだろうからそうだろう、というその場の空気で醸成されたいわれのない誹謗中傷である。それも顔を隠した匿名で、だ。

山本七平は「空気」の研究（文藝春秋）のなかで、先の太平洋戦争時の戦艦大和の事例を挙げ、大和の出撃を無謀とする人びとにはすべて、それを無謀と断ずるに至る細かいデータや明確な根拠があり、大和出撃の正当性の根拠がまったくなかった、にもかかわらず、最終的には、そうせざるを得なかった、というその場の「空気」によって大和は出撃した、と「あの時はああせざるを得なかった」という「空気」について考察して

張しても仕方がないことだ、と矛先を納めるときがある。ほとんどが、「そんな重要な場所ではない」とおもっているときだが、その「重要でない場」は自分が判断していることであつて、もしかししたら、その場の意見がその後の世間を決定づけてしまうことになるかもしれないことはだれにもわからない。しかし、ほくらは「空気を読み」ながら生活をしている。ここまでなら、ここまでなら、いや、ここまでなら、と自分で判断して。

「驚愕は、石ころ一つ、一回目の呼吸、一つのうそ、からはじまる」こともあるのだ。

しかし、当然、そうでない、極端な人もいる。「水を差す」人だ。何人かのグループがあると、かならず異論を述べる人がいる。まとまりかけた議論も、ひとりの異論者が出て、收拾がつかなくなるときがある。山本七平も『「水」通常性』の研究』といつて、水を差すと一瞬にしてその場の「空気」が崩壊するが、この場合の「水」はもつとも具体的で目の障害を意味し、それを口にするこによつて、即座に人びとを現実を引き戻すことを意味している、といっている。「水」は人びとを「通常性」に引き戻してくれる、といっている。

ほくは若いころは「水を差す」人だったが、最近はずこしは「空気を読む」ことになれてきた。そんなつまらない、退屈な老人になりかけていて、少々自分にうんざりもしかけているのだが、それでも他人からみるとまだまだ「ダイケは協調性がない」ということになっている。とはいっても、協調しないかわりに異論を他人に押しつけることはしないのだが、そういう利己主義的な考え方が「驚愕は、石ころ一つ、一回目の呼吸、一

つのも、から」に繋がっていくのだろうか。まあ、これはほくの性格だから、いまさらどうもできない。そのうち蟻の穴から漏れてきた一滴の「驚愕」にうちのめされることもあるかもしれない。

誰もが皆、在日韓国、朝鮮人と日本政府との関係を、先の戦争以前に遡って学習しなければならぬ、などとおもわれないが、自分が知らないことは、他人の「煽り」にのらない、それだけでいいのだが、若い人はネットに書かれていることはほんとうのことで、ネットに書かれていないことはなかったことである、とおもっている人が多いと聞いてびっくりしたことがある。

新聞記者の人でも、ネットにはこう載ってました、と言ったりする。誰だかわからない人が書いたものを、いろんな人がコピー（複写）をして、間違ったことが書かれていても、それを検証することなくコピー（複写）されて、それを讀んだひとがそれを鵜呑みにしてコピー（複写）する、そんなことが次々に繰り返され、それがいつのまにかネット上の多数意見になっている場合もあるだろうに。

ネットの世界というと、秋葉原の路上で死傷者17名の事件を起こした加藤智大について書かれた中島岳志の『秋葉原事件』（朝日新聞出版）を読むと、母親との関係を発端に、加藤は他者との人間関係がうまく結ばなくなると、ネットの世界に埋没したようだが、それでも、加藤には現実の世界におもいのほか多くの友人がいた、と取材をした中島は驚いている。加藤は青森や仙台などを転々とし、仕事も転々としたが、その土地土地

折してしまふ。

加藤は「本音」と「本心」は異なるといっている。彼は「ホストクラブで自爆テロ」という書き込みなどをするのだが、これはあくまでもレスをもらうための「ネタ」でこの「ネタ」が加藤の「本心」とは異なる「本音」だったという、屈折した自我を形成してしまい、こんな「本音のネタ」の書き込みが、心を開くことのできる相手を引き寄せられるとおもったし、そんな相手に「ベタ」な自分を承認してもらいたかった加藤は「掲示板の人間関係が大切だった」といい、「掲示板は同じ場所を共有している人同士のやりとりです。私の部屋に遊びに来てくれる人のような感覚です」と掲示板でのやり取りに真の人間関係を見出そうとするが、友だちだとおもっていた女性に彼氏がいたり、建前ではない不謹慎な「本音」は忌避されたり、としたあげく、加藤のなりすましもでてきたりして、加藤はネットの世界でもそのアイデンティティを見失ってしまうことになる。顔の見えない相手、匿名の相手との透明な関係に真の自我の表出を願った加藤は、特異な存在だったかどうか、ネットの世界に疎いばかりにはわからないことだが、加藤のケースは、ネットの世界に限定されることなく、現実のこの世間でもおこりうることのような気がした。友だち百人できるかな、と願いつづけた加藤は自我を喪失して、無関係な人たちを殺してしまつた。それは明日のぼくたちかもしれない。

ネットの世界には、特に、なんとか掲示板やSNSとかいいう手触りの感じられないものには関わらないようにしているぼく

にも、職場にも多くの友人がいたそうである。

もつとも加藤は現実社会の友だち（この友だちという名称ほど曖昧で自己欺瞞的なものはない。友だち百人できるかなとおもっていても相手は、ただの知人程度にしかおもっていないこともあるだろう）は本音で繋がることができないというもどかしさをもっていた。「どうしても透明な関係を結べない」「真の自分を承認してもらえない」とおもっていたそう。透明な関係とは、その関係の背景に嘘偽りのない関係のことをいっているのだろうし、真の自分とは自分の中でこうありたいと希求している自我のことだろうが、そういうものを他者との間で共有することは至難の業だとおもふのだが。

ぼくにはけっこう本音で、自分の弱点をも話せる人が何人かいるのだが、友人はいつ無関係な他者として立ち去っていくかもしれない、とおもっている。絶対的に永続的な関係などあるはずもないだろうとおもっている。「いま、この場での付き合いの誠実ささえあればいいのでは」とおもっている。そんなほくから見ると、加藤の「友人という関係を絶対視する」という命題は、加藤の内面を不幸にするだけのものではしかなかっただろう、とおもってしまうのだが。しかし、それも、生育の過程で、自分の意見がおらずに家庭で大事にされなかった、無視されてきた、という自我意識の防衛反応の一種だったのかもしれない、とおもふと無碍に否定することはできないようにおもふ。

そういう現実の友人から離れた加藤はネットの書き込みの世界に友人を求めていくのだが、そのネットの世界でもかれは屈だが、それでもときどきネットの記事は読むことはある。しかしそれは発信者がわかっているとときだ。内田樹とか藤原新也とか、あるいは新聞社とかの情報発信は参考になっているが、なりすましということもあるらしい。まあ、そんなことをいつていたらすべてが×になってしまうので、そこは、自分の判断で読んでいる。

宇宙を観測しているサイトなどがあるが、コンピュータ解析とはいえ、この世の何にも勝る美しい映像をときどき愉しんでいるのだが、それらも悪意の何者かのニセ映像であるかもしれない、といわれれば、検証のしようもない。でもまあ、ニセ映像でも、これだけ美しい映像なら許せる、そんな気持ちでクリックしている。

劉曉波の「驚愕」からどんどんずれてきてしまったが、サッカーもネットウヨもまだ小さな石ころ、呼吸、ウソ、かもしれないが、それが「驚愕」に生成してしまう日がきたら、きつと世間はもつと騒がしく、貧しくなっているだろう。

塚本敏雄さんの詩集『見晴らしのいいところまで』（書肆山田）から「見晴らしのいいところまで」全篇。

魚まなるひとに会いたくて

バスに乗る

車内は運転手とわたしの二人きりで

彼は神話的な声で来歴を語る

つまりはときどき

ノイズがまじる

川はもう渡ったろうか

大池は過ぎただろうか

あの大池でわたしは少年のころ

釣りをしました

従兄弟のカズちゃん

巨きな鯉を釣り上げたのを覚えています

降り注ぐ 淡々とした冬のひかり

(次、新生中央

お降りの方はお近くのボタンをお押し下さい)

車窓に流れる

冬のひかり

来歴は声の途中で溶ける

お客さん どこまで行くんだね

はて どこまで行くんだらう

とりあえず 行けるところまでかな

なら 観音あたりかな

高台にある観音様なら

見晴らしがいいから

今日は湖が一望できるだらう

抱擁のような

眺望に出会えるかも知れない

不屈の痛みがいつまでも泣いている

湖はどこからでも見えた

デパートの屋上の金網越しに

あるいは高架道の上から

もちろん橋を渡る時にも

そうさ 自在な形象が時間のふりをして佇む

そんな坂道からもね

お客さん ここが折り返しだよ

三十分したらバスは出る

乗り遅れたらもう帰りのバスはないから

下のロータリーにいるから

遅れないようにしなせえよ

塚本さんは、見晴らしのいいところに行きたいとおもっている。

少年のころの記憶は常に豊かな感情をもっている。ひとのころには、とても気持ちのよい記憶だけがまとわりついている感情がこびりついている。そしてひとは、人間関係や社会の仕組みに疲れるときがある。そのとき、快い記憶とともに少年時のあれこれが見え始める。なぜなら、少年時は、いいことだけ。しか記憶しようとしないうから。

おとなになって塚本さんは、

ワタシたちは

戦乱のさなか 戦いなき世の願いへ向けて

精一杯その手を差し伸べつつ

力尽きて世を去らねばならなかった幾千万の

幾十億幾千億の声なき声を

いまに引き継ぐ者

(「遠き言伝へ向けて」部分)

であり、そう願ったにもかかわらず、やがて、

やがて少年は森から帰ってくる

ひどく年老いて

しかし自分が年老いたことには

少しも気づかずに

(「沼の畔で」部分)

少年からおとなになった塚本さんは声なき声を引き継ぐ者の座から逸脱したまま、

深夜とつぜん

首都高速を走りたくなる

(略)

浜崎橋で左へ折れると

築地から銀座 日本橋

欲望がひとしきりの静まりを眠る

無人のオフィスビルの内部がよく見える

じきに江戸橋で向島線に戻る

いつの間にか左に流れているのは隅田川だ

異性の肉体をなぞるように辿ってきた

曲折の走路

性愛の行いに酷似して なお

果てることのない都市の詩学は

齟齬の増殖を愛し

無辜の叙情を恥じる

そして いざこへ帰るのかと背後から

宛名のない追っ手を放つ

(「都市の走路」部分)

塚本さんはバスに乗って、運転手のすすめで、どこからでも見えた湖を、不屈の痛みとともに暮らしてきた日々、そのときどきに見え隠れしていた湖を、今日は見晴らしのいい高台から望もうとする。見えるだらうか。抱擁のような眺望が。自分を抱きしめてくれる懐かしくも、初源的な記憶、快楽と悦楽だけで構成されたダイジェストな記憶が抱擁してくれるだらうか。どこを、どのようにして見晴らせばいいのだらう。

三十分したら帰りのバスはなくなる、といわれたが、塚本さんは帰りのバスに乗ることはないだらう。とりあえず行けるところまでの「とりあえず」がどこまでなのか、塚本さんにもわからないだらうが、帰りのバスに乗って「宛名のない追っ手」を放った場所に戻ることだけはないだらう。「見晴らしのいいところ」という塚本さんの身体性精神性が見渡せるところを探しつづけるしかない。だから、ロータリーでバスはいつまでも塚本さんを待っている。バスの運転手もまた、塚本さんなしに

は帰路につけないことをうすうす感じている。そんな不安定でどこにも確固たるものを生成しないぼくらの日々の一側面をかいま見せてくれる一冊だった。

生物学者、福岡伸一の『世界は分けてもわからない』（講談社現代新書）のなかにマーク・スペクターという青年の逸話が書かれている。

コーネル大学の生化学研究室でガン細胞について研究していた著名なエフレイム・ラツカー教授のもとに1980年、地方の大学から大学院生として24歳のマーク・スペクターがやってくる。かれは実験室での経験がないはずなのに、細胞やタンパク質の分析技術をまたたく間に習得し、さまざまな実験を器用に成功させ、あつというまにラツカーの片腕、というよりは相棒になって、難しい実験を成功させつづけた。

研究室セミナーの際、皆に配られたスペクターのレジュームには、ガン細胞のATP分解酵素のリン酸化を示す黒々とした点がX線フィルム上に明確にあらわれている様子が示されていた。大発見だった。同時に、ラツカーの仮説が疑問の余地なく立証されていた。

矢継ぎ早にスペクターとラツカーは論文を発表していった。

世界中から、スペクターとラツカーに共同研究の申し入れが届いた。リン酸化酵素のサンプルを分与してほしいとスペクターは、ラツカー教授の「欲望」を満たすことに成功した。

だが、頂点に行きつめた以上、その偽装が見破られるのは時間の問題だっただろう。スペクターだけが実験に成功してほかの研究者が追試を行えないというのは科学ではないからだ。

だから、福岡のいうように、「誰かにとめてもらいたかった」のかもしれない。魔物に魅入られつづけた虚世界からこちら側に戻りたかったのかもしれない、とおもったりするが、そのことはスペクター自身でないと、いや、スペクター自身も自分の奥底に隠されている無意識など、理解できないのかもしれない。ただ、ぼくにいえるのは、ひとには魔物が棲みつくことがあって、たぶん、だれにも、抗うことなどできないかもしれない、ということだ。ひとは清廉潔白に生きていかなければならない、なんてこといったら誰も生きていけないだろうし、ひとはみな、ささやかな嘘、ちいさな擬態、魔が差したような偽装で自分の身を守りながら生きている。

昨日、NHK・BS放送でひとはなぜ鬱になるのか、という番組をやっていた。不安や恐怖といった記憶が扁桃体の異常をもたらし、ストレスホルモンの異常分泌を促し、脳を萎縮させるからだ、と説明していたが、地方大学から著名な教授のもとにやって

いう依頼の電話が引きも切らなかつた。大学院の一年生にもかかわらず、スペクターにたいして学会や研究会から講演の依頼が殺到した。スペクターとラツカーは確実にノーベル賞をとる、そんな噂まで飛び交いはじめていた。

そんなある日、スペクターのしまい忘れていた実験器具を手にとった同僚の研究者が「変なこと」に気づく。あるはずのない放射能が検出され、サンプルが巧みにすり替えられ、実験が偽装されていたことに気づく。ラツカーはスペクターに、三週間やるからリン酸化酵素を新たに生成しなおしてこい、その活性をこちらで調べるから、と通告し、スペクターも同意したが、三週間たつてもスペクターは研究室に戻ってこなかつた。福岡は最後にこう書いている。

それまで、実験サンプルやゲルなどの生のデータが他人の手に触れないよう、細心の注意を払っていたはずのスペクターはなぜ、このときに限って、乾燥ゲルを無造作に実験台の上に放置してしまったのだろう。このやり方ですつとうまくことが運ばれてきたゆえに油断があつたのだろうか。それとも彼は、誰かにとめてもらいたかつたのだろうか。

ひとは魔物に取り憑かれる瞬間がある。ぼくはまだ魔物に出合っていないからその悦楽はわからないのだが、きつと甘美なことだろう。それと同時に、魔物がいつ自分に牙をむけるかも

きたスペクターもまた、実力以上に成果を發揮したい、いや、しなければ、というおもいが優先し、それが扁桃体を興奮させ、ストレスホルモンを過剰に分泌させてしまったのだろうか。

科学の世界、学者の世界のことはまったくわからないのだが、自分の研究が日の目を見るか、見ないかではまったく待遇が変わってくるのは容易に想像できる。研究費が多額に出たり、あるいは、有用な人材であるとの世評を得たりと。

最初ひとつふたつの実験に成功したスペクターが、ついつい味をしめ、自分の身の丈を超えた実験の偽装に手を染めたのもそこからへんに理由があるのかもしれない。

人間関係がうまくいかなくて、社会的にも疎まれてる若いひとがネットの世界にはまり込んで、あることないことの虚構の世界に身の置き所を見つけてしまうように、若い科学の研究者も、なにか成果を上げなければと、ストレスをため込んで、つい、偽装という虚構に手を染めることがあるのだろう、きつと。「世間を騒がした、してはならないことをしてしまった」とマスコミは正義面で糾弾するが、してはならないことをしてしまうのもひとである。